

‘All Causes Shall Give Way’ —マクベス王の闘争*

春 原 正 彦

Edward Dowden は *Macbeth* が「黄昏の悲劇、深い闇が人の魂に入り込む悲劇だ」として、‘Good things of day begin to droop and drowse’ (3.2.53)¹ という 1 行がこの作品の ‘motto’ と考えられると言っている²。また Bernard McElroy は登場人物の医者言う ‘God, God forgive us all!’ (5.1.65) をこの作品の題銘 epigram にしてもよいと述べる³。そうした作品全体を縮約する劇中の表現として、Francis Fergusson は ‘Outran the pauser, reason’ (2.3.108) という半行に着目し、作品論を物している。彼はアリストテレスの『詩学』の中の「悲劇とはアクションの模倣なり」という理論に『マクベス』がよく合致すると述べた上で、「『マクベス』という作品は、‘to outrun the pauser, reason’ という語句が示すと思われるアクション（もしくは動機）の模倣である⁴」と要言する。ファーガソンの向こうを張って、『マクベス』はむしろ ‘For mine own good / All causes shall give way’ (3.4.134-135) というモットーに基づくアクションを描いたものといえないか、というのが小論の趣意である。筆者は、シェイクスピアの悲劇において ‘cause’ という語はいわば ‘theme word’ ともいうべき鍵語の一つであり、作品の主題を解く鍵を握っていると考えて、これまで *King Lear* と *Othello* を論じたことがあるが、本論はやはり主題論的な『マクベス』についての ‘cause’ 論である。

*

ファーガソンの掲げる文句は、ダンカン王暗殺が判明して起きる混乱の中で、重要証人たるべき王の付き人をマクベスが殺害して、その言い訳として述べるくだりの中にある。

Th’expedition of my violent love
Outran the pauser, reason. (2.3.107-108)

「わたしの激しい敬愛の念が勢い余って、ぐずの理性の先を越したのです」とでも訳せよう。ただしファーガソンは ‘to outrun’ という風に不定詞の形で抜き出していて、理性を振り切って先に出るのは、ここでのマクベスの行為だけではなく、終局においてマルカムやマクダフは神の加護 (superrational grace of faith) によって勝利するのだから、これも別の意味で「理性の先を越す」のだと考える。

‘to outrun’ は当然、競走 (competition, race) の意味を含意し、それは、例えばマクベスが、大逆を画策し実行した時も、貪欲や野心が理性の先を越したことになり、その他、例えばダンカン王の恩賞がマクベスの勲功に「追いつく (overtake) ことができない」というような形でも表されていると指摘する。マクベス夫妻が「理性に反する競走」を始めるが、それは勝ち目のないことがマクベスにもわかっているレースであり、またこの劇の筋自体がそのスピード感からして「必死の競走」の模倣だということも抜き取りなく指摘する。

またファーガスンは、上記の表現が、‘to lift oneself by one’s own bootstraps’ というイディオムの表すような不可能な離れ業 ‘an impossible stunt’, 理を越え、自然に反する抗争 ‘striving beyond reason,’ ‘stunt against reason and nature’ であり、時を出し抜く、もしくは超越する (outwit or transcend time) 行為を示唆するものと強調する。

以上は主に最初の2幕のアクションの説明になると断った上で、3幕以降についてのファーガスンの考察は、マクダフとマルカムの対話がなされる4幕3場のイングランド宮廷の場に焦点を絞っている。ファーガスンが ‘great scene’ とみなすこの場では、アリストテレスの言う「発見」もしくは「認識」*anagnorisis* による「急転」*peripeteia* があり、この劇の展開点になると言う。すなわちエドワード王による癒しのエピソードは、魔法の魔術と対比されて、超理性的信仰 ‘superrational faith’ による神の恩寵を示し、すでに述べたように「理性の先を越す」ことの善なるヴァリエーションだと考える。この急にスローペースになる場を契機として、マルカムたちも激しいレースの中に参入し勝利することになる。

ファーガスンは、「理性を越える悪」が「理性を越える善」によって倒されるというアクションを明快に分析しており、イメージリを含む例証においても、彼の前後の批評家の観点をよく取り入れ、あるいは先取りしていると思われる。しかし彼の所論では、後半のマクベスについてはほとんど触れられていない。確かにマルカムたちがレースに勝つことは明らかだが、彼らがどう勝つかということがこの劇では真の問題なのであるかという気がする。むしろ負けるマクベスがどう抗するのかがこの劇では問題ではないだろうか。マクベス王は完全犯罪を目論んで、結局は善人に追い詰められる悪人の哀れな末路をたどっているだけなのか。ファーガスンは上述の英宮廷の場面でマルカムたちが「理の兵 ‘their cause’ への信念で結ばれる」⁵ という。この場のマクダフの言葉で言えば ‘the general cause’ (4.3.197) への信念でということになる。これに対して「己の私益のためにすべての理 ‘causes’ を引っ込ませる」と誓ったマクベスがどう最後まで抗争するのか、どうマルカムたちとも、運命とも、自分とも闘うのか、そのことにシェイクスピアの力点が置かれているように筆者には思われる。以下それを見て行きたい。

*

「おのが利益のためならどんな道理もひっこませてやる」とのマクベスのマニフェストは、以後の行動のマニフェストであるだけでなく、劇全体のアクションの要約とも考えられる。

マクベスは善悪の道理が全てわかっていて、しかもそれを十分吟味した上で、迷った末、結局主殺しに踏み切る。王を弑することは私益のために事理にひっこませることにほかならない。そうことばには出さずとも、少なくとも無意識の中ではこのマニフェストのように決意したと見ることができる。しかし本稿では、3幕以降のマクベス（これを「マクベス王」とよぶことにしたい）がどう描かれているかというところに焦点を当てたい。衆目の見るところ、ダンカンを殺して王位につくまでのマクベスは、野心家ではあったろうが、王の信任の厚い、勇猛にして道義心も高い將軍として、悲劇の主人公にふさわしい器量を備えており、その想像力と、悪に対する恐怖心ゆえに我々の共感を得るといえる。しかし王位についてから殺人を重ね、恐怖政治による支配を続けるマクベス王の主人公としてのイメージ像は批評家によってまちまちである。もちろん道徳的に見れば、ますます墮落していくことは明らかであるが、G. Wilson Knight はアレゴリカルな絶対悪の化身としてのマクベス像を提示しているし⁶、Bradley は「ダンカン弑逆後の生涯は...われわれをひきつけてやまぬ光景であり...心理的には性格の発展を描く点でシェイクスピアの諸悲劇中で最も顕著なもの

である』⁷という。John Dover Wilson も、その犯罪は許しがたいと思われるのに「彼の個性はますますすさまじく (portentous), ますますわれわれ魅きつける」⁸と説く。ところが逆に、マクベスは悪事を重ねるにつれて萎縮してゆくのだと考える批評家も多く、「破壊性をもった痴れ者」‘a destructive fool, or a dupe’⁹とされたり、「自動人形」‘automaton’¹⁰となったり、マクベス自身の口にする熊いじめの熊や、狩り立てられて自暴自棄となった野獣に例えられたりする。このように3幕以降のマクベス王観は極端に異なっている。

この違いはどこからくるのだろうか。端的に言って、作者の共感を得て描かれてはいるが、やはり悪の報いは墮地獄という因果応報が主題だと考えると、マクベスは報いを受ける段階では追い詰められ、ただただ絶望的な悪あがきをし、惨めに苦しむ悪人に墮してゆくと見えるのではないか。それに対し、この作品が因果応報の〈物語〉のもつ、いわば原型的な (archetypal) 〈すわり〉をもっていて、その安定性の上に立っていることは紛れもないが、シェイクスピアは類型的な悪因悪果とは違ったとらえ方をしているのではないかと考えれば、後半のマクベス王についてもっと別の相貌が観客に見えてくるのではないだろうか。本論では後者の立場で、マクベス王が悪に徹し、己の「善」、私益のためにすべての因果律、道理を従わせようと最後まで苦闘する姿が浮き彫りになってくる様を見てゆきたい。

*

標題のせりふが出てくるのは、いわばマクベスが王らしきことをする最初にして最後の場、晩餐会が終わった後である。周知のごとく、殺し屋たちに殺害させたバンクォーの亡霊が現れて、マクベスは身も世もない驚愕狼狽ぶりを見せ、廷臣たちの疑惑を深めてしまう。しかし亡霊はとにもかくにも消え失せ、王妃が何とかその場を取り繕う。客たちが去った後は、王妃はそれ以上夫の失態ぶりを責めない。それもあって、マクベスはすぐに自分を取り戻すように見える。王位について以来マクベス夫人の方がことば少なくなってきた二人の対話のパターンで作者はそれを示す。マクダフを呼びつけても顔をささぬことをどう思うか、などと話した後で、マクベスは明日の朝早く魔女たちに会いに行くつもりだと王妃に告げて、こう言う。

...for now I am bent to know
By the worst means the worst. For mine own good
All causes shall give way. I am in blood
Stepped in so far that, should I wade no more,
Returning were as tedious as go o'er. (3. 4. 133-137. 傍線筆者)

この маниフェストは、『失樂園』でセイタンが墮天使となって‘Evil be thou my Good’ (4巻) と悪に心を定め、アダムたちを陥れようとするのに似る。あるいはクリストファー・マーロウの『フォースタス博士』でフォースタスが「地獄も極楽も変わりはない」(1. 3.) と言ってルシファーに魂を売り渡そうとするのを思い起こさせる。マクベスも、本来の自分の価値観とは正反対の価値観を選び取るとはっきり意識して、宣言したことになる。

よく指摘されることだが、悪を奉ずる道を選んだマクベスと、それを避けようとしたバンクォーは、可能な限り対照的に描かれている。バンクォーも「超自然の誘い^{いざな}」のために不眠や悪夢に苦しむ、

(3.1.35)をつかさどってゆこうと考えたであろう。しかし実際王位についてみると、そうは行かなかった。不安でたまらず、「心の中はさそりで一杯」である。言うまでもなく、その第一の原因はバンクォー。自分より器量があるし、‘Thou played’st most foully for’t’と疑っているに相違ないし、何よりも魔女の予言によれば、彼の子孫こそ未来の王だと言う。もしそうだとしたら、バンクォーの子孫のために永遠の珠玉たる魂を悪魔に譲り渡したことになるではないか、と思案のあげく、マクベスは昂然と

Rather than so, come fate into the list
And champion me to th’utterance. (3.1.72-73)

と言い放ち、たおれて後やむ闘いをせんと運命に挑みかかる。およそ<物語>narrativeにおいては、予言は実現するのが事理と考えてよいから、運命と勝負をしてその実現を阻止しようとするのは、事理をひっこませようとするに他ならないと我々は解する。マクベスはこうも語る。

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,
Ere we will eat our meal in fear, and sleep
In the affliction of these terrible dreams
That shake us nightly. (3.2.18-21)

この言葉も、論理としては、「安心して暮らせるなら、世界が破滅してもよい」というのだから、「己のためならすべての道理をひっこませる」というモットーを誇張法によって変形したものといえる。そして、‘Things bad begun make strong themselves by ill’ (3.2.56) と決意を示す。こうしてバンクォーを殺そうと決めた時点で、マクベス王は魔道に生きようとほぞを固める、もしくは固めざるをえないことが示される。

*

「道理をひっこませる」というマクベス王の攻撃的な闘いがテーマといえれば、当然の反証として、‘Tomorrow, and tomorrow’のスピーチや「日の目をみるのがいやになった」‘I ’gin to be aweary of the sun’ (5.5.47) といった挫折感、虚無感に満ちた数々のマクベスのせりふが想起されるかもしれない。確かに、マクベスは決して強気一点張りで事理をひっこませてみせるという言動に邁進しているのではない。道理を犯したり、犯そうとすると挫折があり、弱音を吐いたり呪ったりするのだが、すぐにまたそれに負けまいとして、改めて「道理をひっこませよう」と自分に言い聞かせる、という具合にシェイクスピアは描いているように思われる。上で触れたように、そもそも問題にしているマニフェストも、殺害させたばかりのバンクォーの亡霊が現れて動転した直後に述べられたことばであった。また殺し屋から、バンクォーは殺したが、息子のフリーアンスは取り逃がしたと聞くと、

But now I am cabined, cribbed, confined, bound in
To saucy doubts and fears. But Bunquo’s safe? (3.4.23-24)

と落胆、動揺の色を隠せないが、ここでも「バンクォーは大丈夫だろうな」と意図しない？ 地口を

きっかけに気を取り直す。さらに魔女たちに二度目に会ってバンクォーの子孫たちの幻影を見せられ、子孫についての予言が正しいと思知らされると、マクベスはほとんど絶望に突き落とされたかのように「あいつらを信じるやつは皆地獄へ落ちろ」(4.1.155)という捨て鉢な言い方をする。だが、その直前に聞かされた‘None of woman born shall harm Macbeth’などの予言を心頼みに、これからも行動あるのみと立ち直って、マクダフの城を襲う決意をする。マクベス王は落胆はするが、決して絶望はしない。

そういう描き方の意味としては、少なくとも三つのことが考えられる。一つは、今言ったように弱気になるが、それをはね返すということで負けじ魂を示すことができるということ。二つめは、悪に徹し切れないことで、マクベスは決して Wilson Knight のような絶対悪の化身や権化となるのではなく、最後まで感ずる心をもった人間であることを示すという点である。三つめは、道理をひっこませるとか、予言を阻止するという言表がもつ内包にかかわる。すなわち、マクベスの言っていることは、本当はファーガスンの言う「不可能な離れ業」であるということ了我々はすぐ感じ取る。だからマクベスがそうしたマニフェストを実行に移そうとし続けることによって、その気概が示されると同時に、新批評的にいえば、＜暖昧性＞、＜アイロニー＞が看取されることをシェイクスピアは明らかに意識している。そしてその描出の特徴は、自分のマニフェストしたことが不可能事かもしれないとか、自分は罪深いとマクベス王自身わかっているに違いないが、それを口に出しては言わず、主に結果として生じてくる彼の挫折感の表出によって、マクベスの企てのアイロニー感を表出している点にある。例えばダンカンを殺害した直後には、その罪悪感から ‘Macbeth does murder sleep’ とか、‘Sleep no more’ という声が聞こえたとしつこく繰り返す、事実そうなったに違いないことは、王妃の ‘You lack the season of all natures, sleep’ (3.4.140) という言葉からもうかがえる。しかしマクベス王自身の口からは、眠れないとか、悪夢にうなされたという言葉は先ほどの呪詛の中以降は出てこなくなる。また、「おのが病みむくんだことわり理 (‘his distempered cause’) を帯で締めつけることもできぬ」(5.2.15-16) とか、「神経が参ってひるんだり、びくついても誰がとがめだてできよう、自分の中のすべてがおのれの存在そのものを呪っているのだから」(5.2.22-25) とかと、以前のマクベスであつたら言いそうなことをマクベス王は言わなくなり、シェイクスピアはクロス役に言わせていることは注目される。そうした良心の呵責の表出や自己言及によって、弱気の色合いが強すぎ、肝心の主人公の気概の描出が相対的に弱まらないようにするための工夫と見るべきであろう。「マクベス王」の呼称もそうだったが、この作品では、シェイクスピアが言わせなくなったり、言わせない事柄に留意することが重要であると思われる。

*

不安を除くべく、再度魔女たちに会ったマクベスが答えを強要する際にも、上述した自己中心的な論理を用いる。

I conjure you by that which you profess,
Howe'er you come to know it, answer me.
Though you unite the winds and let them fight
Against the churches, though the yeasty waves
Confound and swallow navigation up,
Though bladed corn be lodg'd, and trees blown down,

Though castles topple on their warders’ heads,
Though palaces and pyramids do slope
Their heads to their foundations, though the treasure
Of nature’s germens tumble all together
Even till destruction sicken, answer me
To what I ask you. (4. 1. 66-77)

ここでも、ウィルソン・ナイトの言葉を借りると「自分さえ満足できれば」¹² よい、天が下の自然の因果律が破壊されてもよいから、あくまで質問に答えさせようという。Walter Clyde Curryはこの中の‘nature’s germens tumble’という表現に留意をうながし、それがアウグスティヌスやトマス・アクィナスの説く中世の悪の形而上学の概念だとする。自然による造化・増殖は神の意志によるものであり、因果律‘causes of things’の典型であるわけだが、天使や墮天使たる悪魔も種(しゅ)の種(たね)を見てその結果を見通したり、その生成に影響を与えたり、変形させたりできるとされ、『マクベス』でもそのことが魔女たちの力と結びつけられているという¹³。

これに関連して、アーデン版 *Macbeth* の編者 Kenneth Muir は上記引用部分の注釈で、上のナイトの評言や、カリーの‘nature’s germens’についての説明をも援用した上で、やはりマクベスは目的が手段を正当化するという無理な論法に出ているのだ、とコメントしているのだが、これは「マクベスがこの劇の初めからどれほど落ちて来たか (decline) を示している」¹⁴ と結論づける。この結論はうなずけない。道徳的に言えばその通りだが、劇的效果としては、ナイトにしてもカリーにしても、マクベスの主人公としての器量が初めより大きくなると考えているからだ。例えばカリーは、自分はマクベスの人物について論じてはいないと断ってはいるが、マクベスのような悲劇の主人公は、倫理的規範とは別に「われわれの心の中では最初より無限にゆたかな、巨大な人物として浮かび上がってくる」¹⁵ と述べている。

マクベス王のマニフェストに示される姿勢は、3幕5場で魔女たちがヘカテに会う場面でも、クロス風のコメントによって表されている。ついでながら、この場面はシェイクスピアの真筆性が疑われている部分だが、劇的には作品全体と極めてよく整合しているように筆者には思われる。例えばこの場面の実質的な締めくくりの言葉は‘...security / Is mortals’ chiefest enemy.’ (32-33) だが、マクベスが、「女から生まれた者が…」他の予言に「安心」するというモチーフによく合っている。また、この作品において、場が終わる際の2行連句が、シェイクスピアの全作品中で最も多く用いられるというが¹⁶、その多くが「どんなに長い夜でも明けない夜はない」といったアフォリズム的な表現であり、上の引用句はそうしたスタイルにもマッチしている。Northrop Frye 流に言えば、作品構造として論じる限り、不自然な継ぎ目は感じられず、真筆性、合作はあまり問題にしないでよいように思われる¹⁷。この場でヘカテは、自分に断りなしに勝手にマクベスと「取引」をした、と魔女たちを叱ってから、こう言う。

And, which is worse, all you have done
Hath been but for a wayward son,
Spiteful and wrathful, who, as others do,
Loves for his own ends, not for you. (3. 5. 10-13)

この場でも魔女たちはマクベスがやって来ることを「出し抜いて」知っていることに我々は気づく

が、マクベスはわがままで「自分のため」ということしか考えていないこともまた、彼らは見抜いていることになる。そしてヘカテは上掲の締めくくりのカプレットの直前にもこう言うのだ。

He shall spurn fate, scorn death, and bear
His hopes 'bove wisdom, grace, and fear; (30-31)

まさにマクベス王は「運命」をも蹴飛ばし、英知や、(悪や誘惑に抗すべき力となる)神の恩寵、恐怖もものかは、不死身・不敗予言の希望にすがって生きようとするではないか。

事理を越えるという意志は、マクベスの「時」に対する意識の中にも当然現れる。マクベスの未来志向ということが言われる。例えばJames L. Calderwoodはハムレットが復讐という過去に関わる事柄にこだわらなくてはいけないのに対し、マクベスは予言という未来に関わる思惟が中心で、ニーチェ的権力への意志を持っていて未来志向だと言う¹⁸。コールダーウッドによれば、マクベスが自殺しをして王位についたり、次々に人の寿命を奪うのは時を早め、時を越えて未来を求めることであり、最後にそういう「マクベスに時が復讐するのだ」¹⁹という。つまり、その意味でもマクベスは、己のために道理をひっこませようとし、時とも闘ったことになる。

未来志向といえ、マクベスはいわゆる‘Tomorrow speech’で‘Tomorrow and tomorrow...’と言い、例えば‘Today, and then today...’とは言わないことに留意してもよいだろう。普通、人間がだんだんと追い詰められてその非運を嘆く場合、一日一日と過ぎて行くと感じるのは「今日」であろう。シェイクスピアが「明日、そして明日...」とマクベスに言わせているのは、マクベスが、ただうつむきかげんに生の空しさ、虚無感を表白しているだけではないことを示すのではないか。恐らく無意識の領域では過去にとらわれているからこそ、眠れず、悪夢や幻覚に襲われるはずだが、意識的には、明日に希望をつなごうという志向をもっている。ハムレットと同様に、言葉や思考は行動の妨げ、論より実行、いたずらに時をうつすな、と自分に言い聞かせ、しかしハムレットとは違って、マクベス王は主体的に行動し、実行する。コールダーウッドも指摘するように、‘tomorrow’は‘will creep’するのではなく‘creeps’するとある²⁰。その意味では、マクベスにおいては「明日」が「今日」化されていると言えるかもしれない。

マクベスの未来志向は、自分はもう相当長生きした、自分の人生の葉は黄ばんでしまったといって、過去、現在を考えていると思える有名なくだりにも感取できそうだ。

And that which should accompany old age,
As honour, love, obedience, troops of friends,
I must not look to have....(5.3.25-27)

良く見ると、追い詰められたこの期に及んでも、むしろ、「若い」時には持っていたに違いないこれらの善を、マクベスは「失った」とか「持っていない」ではなく、「期待できない」、「持てない」と言っている。

たびたび発せられるマクベスの呪いも、未来永劫呪われよというのだから未来に関わる。

Deny me this,
And an eternal curse fall upon you ! (4.1.120-121)

Let this pernicious hour
Stand aye accursed in the calendar. (4.1.149-150)

マクベス王が未来を中心に思惟しても魔女にも「時」にも「出し抜かれる」。

Time, thou anticipat'st my dread exploits. (4.1.160)

「明日」をマクベス王はつかむことができないゆえに、あくまでも「明日」を追っての毎日ではなくてはならない。その意味ではシシュフォスの神話の相貌も帯びてきて、一層挫折に満ちた苦闘であると我々に感ぜられる。

*

マルカムやイングランドの軍勢が攻めて来たとは知っても、「肉が骨からそぎ落されるまで戦うぞ」(5.3.33)と、ただ一人士気盛んなマクベスであったが、王妃が死に、バーナムの森が動いて来たことを知ると、マクベスは人生の無常を嘆き、「世界の仕組みがだめになればよい」(5.5.48)と強い落胆を示す。あるいは、強気のスタンスを示すようにも見える「せめて鎧をつけて死ぬぞ」(5.5.50)も弱音であろう。また、熊いじめの熊のように杭に縛りつけられて、逃げることもならず、「勝負的一幕を演じなくてはならぬ」(5.7.2)とも嘆くが、その舌の根も乾かぬうちに、寄せ手イギリス軍のシュワードの息子 (Young Siward) と戦ってこれを倒し、おまえも女から生まれたな、と勝ち誇る一場をシェイクスピアは挟みこむのを忘れない。そして、今やダンシネーン之城も開け渡してしまい孤軍奮闘の形となったマクベスだが、

Why should I play the Roman fool, and die
On mine own sword? Whiles I see lives, the gashes
Do better upon them. (5.10.1-3)

と、敵を撃ちてしやまんの戦意は衰えずにいる。そこにマクダフが、おそらく背後から登場する。「返せ」と呼びかけられて、マクダフに気づいたマクベスのせりふはこうであった。

Of all men else I have avoided thee.
But get thee back. My soul is too much charged
With blood of thine already. (5.10.4-6. 傍線筆者)

まず、「俺の魂はお前の血を請け負い過ぎている」という言い方は、マクベスの魂の感じる力がいまだ萎えていないことを簡明に示していると思われる。それから傍線を施した‘But’に焦点をあてて考えてみたい。シェイクスピアは、この逆接（もしくは反意）接続詞の使い方によって、マクベスの心的傾向を巧みに示していると思われるからである。まず、魔女が気をつけよと言った相手でもあるし、その妻子を惨殺しているから、まず本能的な恐れが「誰よりも貴様に会いたくなかった」と言わせたと見てよいだろう。そして‘But’とってから「戻って行け」という。この‘but’によるつながりは微妙なものがある。ここはむしろ、順接で「だから」という方が素直につながるところ

だ。

実はさきほど触れたシェアードの息子との一騎打ちの後ではマクベスはこう言っている。

Thou wast born of woman,
But swords I smile at, weapons laugh to scorn,
Brandished by man that's of a woman born. (5.7.12-14. 傍線筆者)

ここも「おまえも女から生まれたな」と、「どんな剣にも笑みを浮かべ、どんな武器をもせせら笑ってやる、女から生まれた者が振り回すんだ」とは‘but’では論理的にはつながらないように思われる。‘And’が来るか、むしろ日本語訳の訳者がたいていしているように、接続詞を取って解する方が自然に思われる。しかしシェイクスピアが‘but’を用いている意味があるにちがいない。

このような逆接の接続詞の使い方がもう一か所ある。それは、まだ第1幕だが、ダンカン王が長子マルカムを王位継承者に指名した直後のマクベスの傍白の中である。この指名が自分の野望にとって邪魔になると述べた後、こう締めくくる。

Stars, hide your fires,
Let not light see my black and deep desires;
The eye wink at the hand; yet let that be
Which the eye fears, when it is done, to see. (1.4.50-53. 傍線筆者)

ここでもう王殺しをはっきりイメージしているわけだが、「一切の光がなくなれ、目も手を見るな」と言っておいて、「しかしやり終えた時に目が怖くて見られないようなことが起きてくれ」というのは、厳密にいうと、これまた論理的に裂け目が見える。酷似する3幕2場の呪詛の中の‘And’(49)と同様「一切が闇に包まれよ...、そして恐ろしいことが起これ」という方が論理的である。

こうして3度も現れる逆接接続詞による魅力的なシニフィエの裂け目は何を意味するのだろうか。マクベスが本来の自分に反して、理を捨てて悪を取ろうとする時、あるいは悪に生きるようになった時、自然の理に反する行為であるがゆえに、その基本的な思惟やシニフィアンが、「そして、だから(どうなる、どうする)」中心でなくなり、条件反射的に「だが、しかし(どうなれ、どうしなくては)」という風に統合関係をもってしまう、ということシェイクスピアは示しているのではないだろうか。私利私欲のために道理をひっこませるといふマニフェストに則ったマクベスの上述のような言説が、彼の必死の闘いの意志を示すと同時に、このように脱構築を起こし、彼の意図とは別の事を我々に伝えているのである。

マクダフの口から「女から生まれた者がマクベスを倒すことはないだろう」という予言の本当の意味を知らされたマクベスは

Accursed be that tongue that tells me so,
For it hath cowed my better part of man; (5.10.17-18)

と叫ぶ。鋭気をくじかれてしまったことを吐露し、お前とは戦わないと言う。最前まで「わしはほとんど恐ろしさの味というものを忘れてしまった」(5.5.9)とか、「決してびくついたりはしない」(5.5.15)とかと言っていたマクベスがである。しかしながら、ここでマクベスは「待ってくれ」

という類いの命乞いをするわけではない。マクダフから降参しろと言われると、マクベスは一転して降参はしないと告げ、最後にこう言い放つ。

Though Birnam Wood be come to Dunsinane,
And thou opposed being of no woman born,
Yet I will try the last. Before my body
I throw my warlike shield. Lay on, Macduff,
And damned be him that first cries ‘Hold, enough!’

これが我々の聞くマクベス王の最後のことばであるが、彼の最期のことばではない。オセローやハムレットのような最期での自己弁護ないしは自己美化はない。自分の盾に‘warlike’という形容詞をつけるところにも感取できるかも知れない、少しの自己劇化はあろう。自分がすがって心の支えとしていた二つの予言に完全に裏切られても、なおかつ降参はしない、たおれて後やむという闘士の決意をもってシェイクスピアはマクベス王のせりふを終わらせているのだ。

この後‘Exeunt Fighting’のト書きがあって、戦いながら二人は退場するのだが、第1二折本(F₁)では‘Enter Fighting, and Macbeth slain’というト書きがすぐ続いて、戦いながら再登場した上でマクベスが倒される場面が想定されている。この点に関して、大場健治氏が自ら最近編んだテキストで注釈し、主に二つの理由から、再登場の指示はテキスト的に不適切で、自書では取らないとの意見を述べられている。すなわち、「戦いながら退場」だけで十分であり、「戦いながら[再]登場」というト書きは不自然で、必要性は認められないこと、マクベスが舞台上で殺されるのであれば何らかのせりふがあるはずだというのが²¹、その通りであろう。ここでもマクベスが言っていないこと、していないことが意味をもっている。そしてそれが簡潔で緊密な劇構成にも寄与している。このことは、マクベス夫人についても言える。彼女は口数が少なくなり、登場しなくなって、ついに狂ってしまうことで、罪深い人間の弱さを示し、マクベス王の壮絶な闘いぶり、強さの引き立て役となっている。

*

この作品の主人公の罪と罰を描いたものである以上、その死を我々がうべなうことは確かだが、善玉たるマルカムたちと一体感をもって喝采をおくることはあるまい。我々が終始マクベスの側に立って劇のアクションを見つめるように作られていることは間違いない。作者によって、我々はマクベスの共犯者とは行かなくても、共感者にはさせられる。よく言われることだが、マクベスにはリチャード三世やイアーゴのように、道徳劇の悪玉 Vice 的な明るさとか、フォールスタッフや『ジョン王』に登場する庶子の持ついわば「悪の魅力」、悪の美学のような属性を付与されていない。ファウストのように悪魔に魂を売った見返りを一時的にせよ享受するというわけでもなければ、生まれつきの悪人として悪事を楽しんだり、筋書き通り運んだことにほくそ笑んだりということがないのである。前半はむしろ悪に対するマクベスの恐怖心ゆえに魅せられ、後半はひたすら闘わねばならぬ‘Macbeth Agonistes’ともいべき姿が見えて来て、これに引きつけられるという他はない。悪に徹して血河を渡ろうとする気概、運命に抗する人間の「生きる意志」、不屈の魂、しかし必然的にそれに徹し切れない挫折感や孤独感、そして敗北。そのとりあわせに畏怖と憐憫を感じ、われわれの道義的嫌悪感が最小限に押さえられて、最後まで共感を失わないといえる。「おのが利益の

ためならどんな道理をも引っ込ませ」て、悪に生きるという不可能事を企て、人間の限界に挑む苛烈な闘争者の悲劇、これが後半に一層よく見えてくる。そうした人間の闘争のテーマを緊密な劇的構成をもって、これほどみごとに表現した作品はあるまい。それは、月並みな因果応報・復讐譚、神慮表象、「為政者の鑑」的教訓物語、贖罪のいけにえを捧げる儀式体験表象といったものとは違うように思われる。マクベスの一生は、やはり芸術としてのみ真実であるような「不可能事」として示されていて、上述のような実人生の可能事の表象を主眼とする作品がもつ「すわり」をシェイクスピアは利用しつつ、『マクベス』においてもそれらに揺さぶりをかけている。

注

*本論の大意は、2000年7月の大妻女子大学英文学会コロキウムで「シェイクスピア悲劇における‘cause’論」と題する口頭発表の一部として触れたことがある。

- 1 シェイクスピアからの引用はすべて Stephen Greenblatt, gen. ed. *The Norton Shakespeare Based on the Oxford Edition* (New York: Norton, 1997) に拠る。
- 2 Edward Dowden, *Shakespeare: A Critical Study of His Mind and Art* (1875; New York: Capricorn Books, 1962) 244.
- 3 Bernard McElroy, *Shakespeare's Mature Tragedies* (Princeton: Princeton UP, 1973) 211.
- 4 Francis Fergusson, ‘Macbeth as the Imitation of action’ (1952; rpt. in *Shakespeare: The Tragedies*, ed. Alfred Harbage (Eaglewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1964) 112.
- 5 Fergusson 110.
- 6 G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (1930; London: Methuen, 1949) 140-159.
- 7 A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy: Lectures on ‘Hamlet,’ ‘Othello,’ ‘King Lear,’ ‘Macbeth’* (London: Macmillan) 359.
- 8 John Dover Wilson, ed. *Macbeth*, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1947) lxviii.
- 9 A. R. Braunmuller, ed. *Macbeth*, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1997) 40.
- 10 Terry Eagleton, *William Shakespeare* (Oxford: Basil Blackwell, 1985) 3.
- 11 Eagleton 7.
- 12 Knight 155.
- 13 Walter Clyde Curry, *Shakespeare's Philosophical Patterns* (Gloucester: Peter Smith, 1968) 29-52.
- 14 Kenneth Muir, ed. *Macbeth*, The Arden Shakespeare (1951; London: Methuen, 1984) 110.
- 15 Curry 136.
- 16 Braunmuller 51.
- 17 See Northrop Frye, *A Natural Perspective: The Development of Shakespearean Comedy and Romance* (New York: Harcourt, Brace & World, 1965) 37-38.
- 18 James L. Calderwood, *If it were Done: ‘Macbeth’ and Tragic Action* (Amherst: U of Massachusetts P, 1986) 27.
- 19 Calderwood 13.
- 20 Calderwood 13.
- 21 大場健治編注訳『マクベス』(研究社シェイクスピア選集)(研究社, 2004) 234-236.